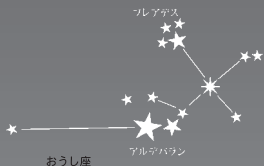


ポラリスを仰ぐ北の大地から



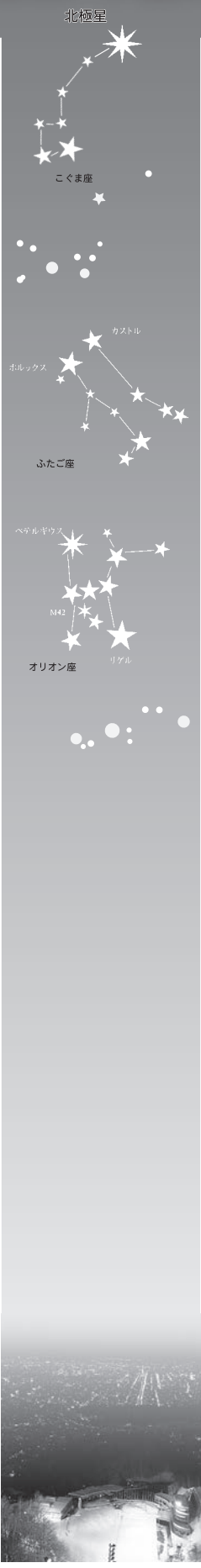
会津の旅

十勝医師会 会長 栗林 秀樹

結婚前、会津の喜多方に一人で旅をした。酒屋の離れのユースホテルで、泊まりは私の他、広島的女子大生3人。夜、皆で炬燵で酒を飲みながら話をした。ユースのご主人の90歳を過ぎた母が話に加わった。

炬燵を囲んでいる部屋は会津の旧家の離れ然としていて茶筆筒の中には古ぼけたこけしが並んでいる。近くに自分でこけしを作らせてくれるこけし工房があり、女子大生たちは昼間そこでこけしを作ってきた話をしていて。老母が言った。「おめえたちの作ったこけしを見せてけれ」女子大生たちはバッグからこけしを取り出した。「しかたねえな」と老母は切り出した。「おめえたち、あの古いこけしは見てみろ。赤いべべだの、赤いかんざしだのつけできれいにしているが、眼はみんなどごどなく悲しい眼をしでる。どうしてだかわがるが?」。確かにそのとおりだった。古いこけしたちに何となく不思議な感じを覚えていたが、それは淋しげな、そして悲しげな眼差しがきれいに着飾った容姿とちぐはぐな感じを与えていたのだ。

『おめえたちは知るまいが、昔は赤ん坊が生まれても、男なら育てだが、女だば、むだ飯食いと言われて、生まれですぐに殺されただ。まびきつつうてな、どの親も一度や二度は想い出がある。その子の事を考えるど、寝ても覚めても悲しぐで、悲しぐで、母親はその子の事を思って「あの子が生きていたらこんなべべ着せたかった。こんなかんざしもさしてやりたかった。」そう思いながら死んだ子供のかわりにきれいなべべやきれいなかんざしをつけて大事に作ってかざったのがこげしなんだ。だから、いぐらきれいなべべ着ていでも、そんな母親の気持ちが伝わって、どうしても悲しい顔になるんだ。だから古ういこげしはみいんな女の子でどれも悲しい顔してる。子供を殺す、子供をけすからこげしなんだ』



厚真町への思い

根室市外三郡医師会 会長 杉木 博幸

新千歳空港から中標津空港に向かう旅客機は、必ず厚真町上空を飛行する。昨年の胆振東部地震以後、眼下に見える厚真町は、至る所の山々が崩れ、茶色の山肌がむき出しになっている。想像を絶するエネルギーがこの地域を襲ったことが容易に理解できる。

私の母方の曾祖父は、長野県から厚真に入植した。ここで母の七人兄弟姉妹が誕生し、私には十四人の従兄弟がいる。お盆には農家を継いだ叔父の家に親戚が集結。子供達は田んぼの中を走り回り、虫やカエルを捕まえたり、釣りを楽しんだ。また大人達が用水路に網をしかけ、棒をつついて追い込み漁を行うと、おもしろい程のフナやイワナ、ウグイが捕れ、大人達も子供達も一斉に大歓声を上げたものである。優しい叔父叔母が提供してくれるトウキビ、トマトなどの野菜やジンギスカンを楽しみ、夜は大人達による大宴会がにぎやかに開催される。二階の部屋の壁には、従兄弟達それぞれの背丈が記され、年々の成長の記録となっていた。毎年楽しい夏休みの思い出ができて、そして親戚との絆も深まっていった。秋の稲刈り後には大きなトノサマバツタが採れ、大興奮。私にとって厚真町はかけがえのない地なのである。

私が居住する根室市では、今後巨大地震が発生する確率は非常に高いとされ、日々身構えて過ごしている。しかし誰もが予想し得ない大地震が胆振東部を襲ってしまった。今日も厚真町上空を全日空機で通過してきた。積雪により山肌の様子は分かりづらくなったが、眼下には大きな被害を受け仮設住宅での生活を強いられている方々がいると思うと何ともやりきれない。心からのお見舞いを致すとともに、早期の復興を祈念してやまない。私には毎年厚真町へのふるさと納税を続けさせていただくことしか、ご恩返しの方法が見当たらない。